

除染に満点ない 模索しながら 決断し、責任とる

政治は合意さえ得られれば、新幹線を建設したり消費税を上げたりできる。では大規模な原発事故に対しては？ 福島の人たちの思いに
応えるには、政治は何ができるか、何ができないのか。3・11後の官邸や
内閣にいる政治家の一人、細野豪志・環境相兼原発相に聞いた。

「事故後、福島にどのくらい入
りましたか。」

「大臣になった後、20回から30回
は行っています。」

「知事や市町村長さんたちとは頻
繁に会いますが、若い人たちが年配
の人たちにも集まってもらい、話を
聞いています。」

「身がこもりがちなのは、小さなお
子さんのいるお父さんやお母さんた
ちです。仕事の都合で福島に残らな
いといけない、でもはたして良かっ
たのかと悩んでいる。個人がリス
クを取るのではなく、政治や社会が受
け止めないといけないのに、それが
まだ出てきています。」

「10カ月たちました。あらため
て政治の役割は何だと思いますか。」
「除染も、放射能と健康の問題
も、こうすれば絶対満点というもの
はありません。模索しながら進めな
ければならない。難しいから、管轄
や権限が省庁と省庁の間に落ちてい
るから、国と地方の役割が定まっ
ていないから、などという誰も手
を出さなければ、物事は進みませ
ない。やる人がいないなら環境省でや
らうじゃないかと行って、職員を鼓
舞して1つ1つ取り組んできまし
た。難しいからといって逃げられま
せん。例えば低線量の被曝はどのま
で許容できるのか、避難区域の解除
は年間換算で何シーベルトにする
か、誰かが決めないといけない。合
意のための時間が十分にあるわけ
ではないし、先送りできません。」

「誰かが決める」の「誰か」
は、誰が決めるのでしょうか。
「私の仕事、政治の仕事はそれだ
と承知しています。一番考えているの
は私だ」という思いはあります。」
「政治家の役割とは煎じ詰めてい
く、決断をして、決断したことの
責任を取る、これに尽きます。それ
は意識して行っています。」

「どうして立場がこもり、悩んだ
りする。」
「福島に通うたびに新しい問題が
出てきます。やってもやっても納得
されないものがない仕事です。誰かに
代わってほしいという気持ち

「いや自分しかいないという間
で、揺れ動きました。」
「それはいいのですが。」
「菅内閣が総辞職した時です。野
田内閣の組閣まで数日、空白があっ
た。でも、もう1回やれと言われた
時、これは腹を決めるしかないと思
いました。親兄弟が福島第一原発で
働いていたら、福島が私の選挙区な
ら。自分の中でそう考えるようにし
たり、もう逃げられませぬ。」
「政府は大規模な除染を進める
方針です。除染は、進めれば住める
ところは増えますが、汚染された土
や廃棄物が増えています。」
「長い時間をかけて除染を続け
ていく必要がありますが、土を県外に
運び出すのは、今は難しい。本当に
申し訳ないと思いつながら、除染を
しなければ帰っていただけなのに、
中間貯蔵施設を県内にお願ひせざる
をえませぬ。そこは葛藤がありま
す。」

71年生まれ。28歳で衆院初当選。小沢一郎民主党幹事長の下で副幹事
長、菅内閣で首相補佐官、原発事故担当相。野田内閣で現職。

福島の原発事故対応にあたる閣僚 細野 豪志 さん



「深刻な原発事故が起きたら
どうするか、誰も考えてい
なかった。反省しないといけ
ない」
—鈴木好之撮影

「私は『国に責任がある』と言っ
ています。環境省は今、事故の対応
に取り組んでいます。これまで原
発政策は抜いていません。官僚の中
には、自分の責任ではないのになん
で福島で謝らなければならぬとい
か、と思う人がいるかも知れな
い。現地に行く担当者、私が直接に話せ
る人には、必ず言っています。国家
を背負って行ってください。そう言

痛みを我がことに 帰れる帰れない 対話しながら判断

と表情が変わります」
「除染そのものが地元にお金を
落とし、雇用を生み出すための公共
事業だという見方もあります。」

「確かにお金が落ちます。地元
に雇用を生んだり経済の活力にしたり
ということはある。でも本来は除染
をやり続けることが目的ですから、そ
こは誤解しないでください。」
「悩ましいんです。自分たちの土
地が自分たちの責任でない形で汚染
された。それをその人たちに除染し
てもらおうか、という批判もあっ
て。私も逡巡しました。ただ、俺た
ちがやろうじゃないかという人たち
も福島にはいる。そういう人たちは
とにかく応援したい。」

「最終処分場は福島県外に政
府が発表したら、各地から反発があ
りました。」
「私には、原発そのもののあり方
と二重写しになるようなところがあり
ます。東京あるいは関東は、福島で電
力を作ってもらい、それで安定的な
生活をしてきた。その福島でこうい
う事故が起きた。では汚染物質の貯
蔵は最後まで福島でいいのか。今す
ぐに出来なくても、福島のみならず
が感じている痛みをならんかの形で
分かち合うことは必要じゃないかと
思うのです。」

「もしかすると永田町も霞が関
も、あるいは全国の人たちも、この
問題を我がこととしてとらえようと
するまで戻らないかもしれません。
でももう戻らないと、乗り越
えられないと思えます。」

「福島原発の事故によって、長
期にわたって多数の人たちが戻れな
い地域が生じそうです。もしかし
たら町や村が消えるかも知れません。
政治が判断し、明確に宣言すること
は必要だと思えます。」

「そういう地域はできるだけ小さ
くしたい。できるだけ多くの人に戻
ってほしい。その思いは非常に
強いんです。一方で、それぞれのみな
さんに人生があり生活があります。
どこかで踏ん切って新しい生活を
したいという人も多。事故後2回、
どこかでその話をしなければなら
ないと考えてきました。」

「一度は菅直人総理が辞任する直
前の昨年8月、福島で話してもら
いたいと当時首相補佐官の（私から
言いました。総理とはこのことで何
度も話をしていましたし、3月11日
の事故を直接経験している総理だか
らこそ福島の人たちに言えることば
だと思っただけです。」

「菅首相が福島知事に、原発周
辺で長期間住めない地域が生じると
伝え、年末には野田首相による帰還
困難地域の発表がありました。」
「発表をいつ行うべきか、政府内
でも議論がありました。私は年内に
するべきだと主張しました。年が明
ければ新しい生活を始めたという
方もいる。政治は苦しくても、逃げ
るべきではありません。」
「放射線濃度の高い地域でも、い
つかは帰りたいという方が多数いま
す。私も何人も出会いました。『た
とえ自分が帰れなくても、子供や孫
の代には帰れるようにしてほしい』
と。その思いを政治は受け止めな
なくてはなりません。そして、帰れると
ころとそうでないところを、どこで
線を引くか。どれだけ一人一人の思
いを表現できるか。難しいところ
です。福島のみならず対話してい
く中で判断していきます。」

「政治家は『政治が責任を取
る』とよく言います。『責任』とは
具体的に何をいっているのですか。」
「政治家が官僚と違うのは、固有
名詞がはつきりしていることです。
例えば、いまは細野豪志という政治
家が行っている。判断が間違ってい
たり国民に迷惑をかけたならば、
それは私の責任です。それははつき
りしています。政治家とは、逃げら
れない責任を負うものですね。」

取材を終えて

「政治に何ができるか」
を問う私は、政治に期待
しているのか、いないの
か。自分でもわからない
でいる。だから質問した
のだが、
これだけ多くの人が苦
しんでいても、永田町は
権力闘争を続けている。
先にやることあるだろ
うと言いたい。私たちに
とって政治とは、今のこ
の政治しかないのだから。
(編集委員・刀祿館正明)

◇インタビューは原発の原則40年廃炉などを発表
した6日の記者会見前に行いました。